

平成 18 年度農林水産政策研究所機関評価の結果

社会的な貢献	
<p>(評価)</p> <p>b 評価 (3)</p> <p>c 評価 (3)</p>	<p>(評価に至った理由、改善すべき点等)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今日的なテーマを学会誌や機関誌に研究発表しており、査読付きなので評価できる。 ・ホームページなどを通じて、社会的な関心の強い問題に関わる研究成果を広く伝達したことは高く評価できる。 ・研究成果に関して、その他の各種雑誌など対外的な情報発信がなされている、テーマも社会的ニーズに対応した時宜にあったものが多い、など評価できる。ただし、作成本数は減少している。 ・社会への成果の発信状況については、研究勢力の割には弱い。新聞報道も大半が農業関係紙である。研究発表についてはまずまずの水準にあると判断した。 ・研究成果の発表件数が前年度を下回っている。内容の充実はあったと思われるが、高い評価には至らない。 ・原稿、論文等の発表、口頭発表、掲載などほぼ例年通りの水準であることから判断した。

a : 非常に高い b : 高い c : 普通 d : やや低い e : 低い

機関運営の状況	
(1) 課題設定及び研究実施等における行政部局との連携状況	
<p>(評価)</p> <p>b 評価 (4)</p> <p>c 評価 (2)</p>	<p>(評価に至った理由、改善すべき点等)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・個別課題ごとの連携について、行政側の評価にばらつきはあるが、おおむね良好と判断した。連携が十分でない場合、その要因が政策研の側のみにあるとは限らないことに留意が必要である。 ・プロジェクトチームとしての活動は十分評価できるが、食の安全・安心確保のためのシステム構築に一段の努力が必要である。 ・経済財政諮問会議での議論に対応するという行政からの要請に応えるチーム編成を工夫するなど、機動的である。 ・定量的な分析が必要な研究では、データの入手などで概ね連携が図られているが、一部、情報提供されていないケースも見られる。 ・「安定的な食料フローモデルの構築」といった多方面

	<p>にわたる研究領域において、行政との連携があまり高く評価されていないことは大きな問題と判断した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・タスクフォースへの評価は高いが、プロジェクト研究については、連携状況が不十分との評価が複数見られる。また、情報提供がない、活用がないという指摘もある。
<p>(2) 人材の養成・確保、流動性の促進への取組、外部の関係者等との連携状況</p>	
<p>(評価) b 評価 (3) c 評価 (3)</p>	<p>(評価に至った理由、改善すべき点等)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・定員制度という大きな制約がある中で、強化すべき研究領域での人材確保等に努力した点は、評価できる。 ・本省からの研究職転入を含め、研究体制の強化が図られた。一方、外部研究機関との連携や共同研究はほとんど未達に終わった。 ・行政、外部との交流とも活発化しており、特に民間からの転入があったことは高く評価できるが、新規採用が0というのは評価を下げる。 ・人材の養成・確保は短期的に対処の難しい問題ではあるが、研究強化分野の人材確保など、機動的な取組もある。4名ずつの調整官と調査官は過大ではないか。 ・人事交流についてもおおむね妥当になされていると思うが、他省庁との交流や民間との交流についても尽力して欲しい。 ・行政からの人材の転入は適切だったと思われる。所内の人材養成については、資料が限られており評価が難しい。新規採用が0というのは、将来的な人材の確保という観点から見ると残念である。
<p>(3) 研究課題に応じた機動的・効果的な体制の確保</p>	
<p>(評価) a 評価 (3) b 評価 (2) c 評価 (1)</p>	<p>(評価に至った理由、改善すべき点等)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・情報変化にスピード感を持って弾力的に対応するため、従来部・室制から領域・チーム制への移行を、所内の運用により前倒しで実施した点は評価できる。 ・緊急テーマに対してどの程度効果的かは今後の課題である。 ・短期機動的な対応力の強化とともに、研究員の資質の向上のために、自己研鑽の機会等の充実にも一層の配慮が必要である。 ・研究対象とすべき多種多様な課題の中で、重点化をどう進めるかについて、自らのイニシアティブで研

	<p>究組織の変更等を始めた点は高く評価できる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・部・室制から領域・チーム制への移行により、今後の研究成果が上がることを期待する。 ・国際対応のための体制強化に尽力していることを高く評価するが、他省庁との連携強化も図られたい。
--	---

a : 非常に良い b : 良い c : おおむね妥当 d : やや悪い e : 悪い

総合評価

評価項目	評価結果
(評価) B (B評価(6))	(コメント) <ul style="list-style-type: none"> ・定員や予算面における強い制約がある中で、自らのイニシアティブで、研究組織やその活動内容を、行政的かつ社会的な要請を踏まえて機動化させる方向に進め始めたことは高く評価される。 ・これから進むべき政策の方向に関して国内でコンセンサスを得ることがやや難しい農政分野においては、特に行政と研究の連携促進は決定的に重要ではないか。 ・総じて研究テーマ・成果とも社会ニーズに沿い、タイムリーなもので評価できるが、とりわけ注目されるような研究成果が見られない。特に、今後の世界食糧需給の予測など、重要と思われる研究報告に対する行政部局の評価が、おおむね妥当のレベルに止まっているのは残念である。 ・社会的な貢献の面では、マスメディアへの受け身の対応ではなく、PR等、研究成果を積極的に情報発信していくことも今後考慮すべきではないか。 ・地球温暖化に伴う食料、エネルギー等の及ぼす影響が世界的に喫緊な問題となっている中で、農林水産分野における我が国の政策は重要な位置づけにある。 ・現代の動きが激しい農と食の分野で生き生きと行政や社会に役立つ研究をしているか、また、その研究を生み出す体制が整備されているかが重要である。 ・全体としては問題はないが、貢献度での評価にばらつきが見られる。

[総合評価基準]

1～4の点数を合計し、総合的な評価として、次の3段階で評価を行う。

- A 妥当
- B おおむね妥当
- C 問題が多く改善が必要